

二月は終わりの月？

下野市教育委員会 生涯学習文化課

年末年始の休みが明けるとあっという間に年度末を迎え、二月がもう少し長ければいいのと思うことが時折あります。では、なぜ二月に三〇や三一日がなく二八日で、うるう年があるのでしょうか。この取り決めは、紀元前の古代ローマで使われていた暦が原因となっています。古代ローマでは、現在の二月にあたる月は「二番目の月」ではなく、一年の終わりの月でした。

一年という観念は、古代ローマ時代をさらにさかのぼり、およそ四七〇〇年前の古代エジプトに始まるといわれています。紀元前二七〇〇年頃には、南東地平線にソティスシリウス（大犬座）が現れるとナイル川が氾濫することを見つけます。この氾濫による水と土が麦を育てるための環境に適したのです。この氾濫が三六五と四分の一の周期で起きることを知ったのです。これに対して、紀元前八世紀のローマでは、新月を起点とした「ロムルス暦」を使用しています。当時、月の満ち欠けを見ている見張りが、新月が昇ると「出たぞー」と叫びました。「Calendar」の「Cal」は「叫ぶ＝ラテン語のコール」が語源となっています。しかし、この暦は一〇カ月しかなく、農作業を行

わない冬の期間は月がありませんでした。

紀元前七五〇年王位についたローマ王ヌマ・ポンピリウスが制定した「ヌマ暦」では、一〇カ月にIanuarius（ラニユアリウス：英語でJanuary）とFebruarius（フェブラリウス：英語でFebruary）を追加し一二月とし、平均日数を太陽年に近づける太陰太陽暦に似たような暦としました。この時の名残が実があります。九月の「September」セプテンバーのセプは「七」のセブン、一〇月の「October」オクトーバーのオクトは、オクトパスと同じ「八」だったのです。

この暦では、それぞれの月の日数を二九日か三一日としました。これは古代ローマでは、偶数は不吉とされたからだと考えられています。しかし、年末として加えられた月は例外で二八日しかありません。この年末の月は、祓い清めの月とされたため偶数でも構わなかったようです。ヌマ暦は、一年が三五五日しかないため数年で季節と日付がずれてしまうので、二年に一度、「うるう月」を入れ、その調整の際には「二の月」を二二日か二三日としてその翌日から二七日間のうるう月を挿入する方法をとりました。このうるう月の挿

入がうまくいかず混乱を招いたため、紀元前四五一年にユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）が、エジプトで使用されていた太陽暦を改変し導入したのがユリウス暦で、彼は暦に自分の名前を付けました。この時（Januarius）を年の初めとしFebruariusを二番目の月とし、ヌマ暦では二九日だった日数も三〇・三一日に変更しましたが、Februariusは宗教的な意味合いの強い祭礼が多く行われていたため、混乱を避けるため二八日のままとされたようです。

一五八二年、ユリウス暦による春分の日のずれをローマ・カトリック教会は無視できなくなり、改暦委員会を設置し「グレゴリオ暦」を制定しました。日本がグレゴリオ暦を導入したのは、明治五（一八七二）年で、「太陰太陽暦」を廃して太陽暦を採用することが布告されました。この事情には、当時参議であった大隈重信が深く関わっています。明治六年には閏月がありますが新暦に変え、当時月給制となった官吏の報酬を一カ月分減らせることから急いで暦を変更したと言われています。

（参考）国立天文台天文情報センター